

レジデントのための これだけは知っておきたい！ 消化器外科

山本 雅一 編集
外科医をめざすみなさんへ

八幡総合病院副院長

松 股 孝

昭和54年秋、2年目の研修医時代に研究棟や大学院の若手先輩に10数回にわたって早朝講義をしてもらいました。Bさんが食道静脈瘤の内視鏡所見を講義してくれました。Oさんが胃透視の基本を講義してくれました。Iさんが胃の解剖を講義してくれました。Uさんが創傷治癒の講義をしてくれました。彼らにとっては講義の準備も大変だったようです。当時の文部教官には若手がよく勉強するようになったと言われました。研修医にとっても、今日・明日の臨床に直結する講義は、学生時代の講義と違って、その後10年間は役に立つ内容でした。

そのような内容が、『レジデントのための これだけは知っておきたい！ 消化器外科』に、わずか1日で読破できる量でコンパクトにまとめられています。

例えば、「手術器具の名前」の項には、コンコルドエッジ剪刀のことが出ており、この剪刀を使いこなすところ消化器外科医として卓越した技術の1つといえると述べられています。肝門部胆管・空腸吻合術後の狭窄症例は、肝門部が石のように硬

くなっており、その癒着剝離たるや至難の業ですが、この剪刀を使って見事な癒着剝離をやったのける羽生富士夫先生の手術を見学させていたとき、「どうして出血しないのですか？」と思わず質問してしまいました。すると「癒着剝離は、こちら側とあちら側の血管がちょうど途絶えるところがある。そこにこの剪刀を当てれば出血しない」と、思わずオーッという声を飲み込んでしまう回答でした。

羽生先生に執刀いただいた病院に東京女子医大消化器病センターから赴任した外科医がいました。彼から教わった手術のノウハウは忘れてしまいましたが、前立ちしてくれた彼が手術場を出るときに「ありがとうございました」と言っていた謙虚な姿勢を忘れません。外科修練が人格の陶冶を第1にしてきたのは今も昔も変わりません。以後、彼の母教室である女子医大消化器外科の主任教授は高崎健先生へ、そして山本雅一先生の時代になりましたが、今でも消化器外科医の修練は、この教室の方法が一番よいのだと思っています。

本書に消化器外科学会のリーダーから寄せられたコラムが、また読みごたえがあります。外科手術において一層アートの面が強いゆえんであるという大坪毅人教授。メティエといわれる状況をさしているのでしょうか。「ルノアールの心を、片時も去らなかったのは、アートという言葉の濫用によって黙殺されたメティエの価値の回復であった。彼の眼に見えていたものは、基本的な技術が、師匠から弟子、又師匠になった弟子から新しい弟子へと伝えられ、練磨されて行く驚くほど長いときの経過、無数の無名の個性の発明や工夫を摂取して生きて行く伝統の命の深さなのであった」と小林秀雄が述べています。

初期研修医の皆さんや外科医として第1歩を踏み出した後期研修医の皆さんが、この本を手にとって読めば、帯にある「やっぱり外科が好き」な気持ちになること請け合いです。ぜひ一読をお薦めします。

●B5 頁152 2008年 定価3,780円
(本体3,600円+税5%)

医学書院 刊 (☎ 03-3817-5657)